いい匂ひ（にお）

Story by Yuki Serizawa

「では、本日の会議はこれまでに。懸案となっている諸問題については、担当する提督それぞれが速やかに各部署に連絡のうえ、元帥閣下へご報告頂けるよう、お願い申し上げます」

単なる昔なじみの友人というより、いまやみずからの元帥府を持つまでに出世したラインハルト・フォン・ローエングラムの副将ともいえる立場にある、ジークフリード・キルヒアイス上級大将が、いつもながらの穏やかな笑みとともに会議を締めくくった。

毎週月曜日の定例御前会議が終了し、ローエングラム元帥府に所属する提督たちが、手元の資料を収めたデジタルファイルや書類の束を、ある者は腕に抱え、また別のある者は軍服の隠しに収めて席を立つ。

傍らに立つキルヒアイスを振り返り、なにごとか話しかけているローエングラム侯ラインハルトは、会議の内容に集中していた時とは違い、ふわりとくつろいだ表情になっていた。多分この週末の出来事についてでも話をしているのだろう。

豪華な黄金の髪に縁取られた白皙の美貌、少し尖ったようにさえ見える細い顎先を軽く突き出すようにして腹心の友を見上げる彼の首は、まだ成長途中の若者のものらしくほっそりと繊細で、その頬はまるで陶器の人形のように滑らかだっ

た。
「――……」
「……そうか、わかった。ん――」

話し合いの中でなんらかの合意が得られたのか、すっと立ち上がったラインハルトの椅子を引き、キルヒアイスが机の上のデータファイルを手元の保管庫へと格納する。ごく当然のようにローエングラム元帥の身の回りの事に手を貸すキルヒアイス。眺めるロイエンタール大将の胸中は複雑だった。

『なぜだ――』
と彼は心の中で呟いた。
なぜ、どうして自分の方があの方と出会った時が遅いのだ――。同じ貴族階級に属する者同士、閣下がキルヒアイスと出会う前になぜ自分はあの方と出会うことができなかったのだ……。
暮らしの維持も難しいほど零落したかつてのフォン・ミューゼルが、亡き妻との間の遺児二人を連れてジークフリード・キルヒアイスの住む家の隣に越してきたことが、二人の友誼の始まりであることは、元帥府のみならず、少しでも彼らに興味を持つ人間なら知っていて当然の話であった。
『どうして――?』

隣家にすむ少年、キルヒアイスと偶然出会った事が彼らの信頼と友誼の始まりだとしたら、その僥倖（ぎょうこう）は自分に与えられても良かったものを――。自分とジークフリード・キルヒアイス、双方を比べても自分にこれといった遜色ありとは思えない。思えないどころか亡父の遺した莫大な財産と忠実な執事、家政婦たちに囲まれた環境にいる自分であれば、元帥閣下が大がかりな宮廷の催しに参加なさるにつけても、さりげなく手厚いサポートをしてさしあげる事ができたはずなのに。

容姿ばかりでなく、軍才や政治的手腕においても眩いばかりの煌めきを放つあの方の傍らに立ち、細かな心配りをしてみせるのはキルヒアイスではなく、自分にこそふさわしい……。だがたとえ、心の中でそのように考えたとしても、ロイエンタールは大人であった。思ったことをそのまま口に出してはいけないことを、彼は十分理解している――。それでも恋にも似た憧れの対象を目の前に、ロイエンタールの心の中のモヤモヤはどんどんその濃度を増していき、もはや出口もみえない渦巻き状態に陥っていた。
キルヒアイスのように昼夜（夜もか！）の別なくお側に侍ることは叶わないまでも、このような軍議の場だけではなく、せめて何か一言で個人的に言葉を交わす機会はないもの

か――――。

『なにげない仕草一つまでもが美しい――――』

と、なにやら物欲しげ……という様子は決して見せずに、しかし普段の俊敏さとは打ってかわってノロノロと、机の回りを片づけながらラインハルトの方を盗み見しているロイエンタールに気づいたのか、キルヒアイスがすっとその視界をさえぎった。わざとではないのだろうが、ロイエンタールにはそうとしか思えない角度で、ローエングラム元帥とチラチラと熱い視線を送り続けるロイエンタール間に立ちふさがったのだ。

「閣下、この後はリヒテンラーデ公と会見のお約束がありますが？」

忠実な腹心の顔で、キルヒアイスは次の公務の予定を告げ、退室をうながした。

「あぁ、そうだったな。あまり見たい顔でもないが、一方的にキャンセルするわけにもいかないし」

「はい。事前に使者を持ってご招待のあった宴でありますし、閣下も正式に書状にて参加を了承なさっておられるので……。手みやげの支度は整っています。できれば早めにお出向きになられたほうが……」

「うん。どうせだらだらと長い午餐（ごさん）だろう、早く行ってもそれだけ早く終わるわけじゃないと思うと、つい……な」

やりたくない宿題の言い訳をする子供のように、家事の苦手な部分を後回しにする主婦のように、ラインハルトが溜息をつく。

「向こうもさくっと終わらせたいとお考えですよ、きっと」

「そうかな？それじゃせっせと食べるとするか、あのメンバーと一緒では食欲もなにもあったものではないのだが……」

「それはあちらも同じかと。不用意な発言をしてラインハルト様の逆襲を受けてはたまらないでしょうから。さぞかし胃の痛い思いをしながらの午餐となりましょう」

「それもそうだ」

親友でもある上官の、乗り気になれない気分を上手に受け止め、かつやるべきことはやらねばならぬ……と誘導できるキルヒアイスは、さながら夫の操縦に長けた糟糠の妻といった雰囲気だった。

『ああ、キルヒアイスとはあのように和やかに語り合われるというのに、なぜこの俺には視線の一つも……』

ほがらかに笑い合う主従に、ロイエンタールはさらに心穏